

# 米 山 梅 吉 伝

(昭和50年4月28日米山記念日に於ける)  
長井盛至氏(横浜旭R.C.)講演記録)

☆米 山 梅 吉 と 勝 海 舟

☆日本ロータリーの夜明け

☆米山記念奨学会の発生

☆沼津兵学校と米山梅吉

財団法人 米 山 記 念 館





米山梅吉伝

(財) 米山記念館

昭和50年4月28日  
米山記念日に於ける  
長井盛至氏(横浜旭RC)  
講演記録

第366地区即ち大阪地方では、4月の第4週を米山記念週間に設定して、米山記念奨学会を盛んにしようと努力しているが、それにしても日本ロータリーの大先覚者米山梅吉翁のことについては、余りにも知らされなすぎているとの声が強かったそうである。

われわれの横浜南RCでも、米山奨学生金君を迎えるに当り、私は米山梅吉翁と只今ブームになっている勝海舟にまつわることを聊か述べてみたい。

米山梅吉は1868年即ち明治元年2月4日江戸芝田村町で、大和国高取藩の士族和田竹蔵の三男として生れたが、4才のとき父が死去したために江戸屋敷から母親の郷里静岡県三島在の伯父の家に寄寓することになった。これは母が三島神社の神官の出であったためである。

この地で少年梅吉は小学校と中学を恵まれた教師と勝れた環境の下に過ごすことができた。

小学校は、長兄栄次郎が代用教員をしていた映雪舎で、校長が漢学のできる坊さんであった。中学は明治維新の際江戸から逃れた幕臣の子弟の教育のために建てられた進歩的な教育が行なわれていたところであった。

16才のとき、向学心に燃えていた梅吉は、或る夜家出を決意し、箱根峠を越えて横浜に出、それから初めて汽車に乗って東京に出た。

東京では先輩の紹介で2~3の塾に塾僕をしながら勉強し、最後に入ったのが青山学院の前身の東京英語学校であった。こゝで初めて米人ニラール・バックについて英会話を習得した。

梅吉少年は、もともと非常な秀才で、しかも、快活で、その上眼のパッチリした美少年であったので、早くから静岡県駿東郡長泉村の旧家で大地主の米山藤三郎の養嗣子に懇望されていたが、20才のとき初めて米山梅吉と名乗ることになった。

燃え続けた彼の向学心は遂に21才のとき渡米を決意させてしまった。

サンフランシスコに渡った彼は、加州ベルモント、アカデミーとオハイオ州のウエスアレン大学、ニューヨーク州のシラキュース大学等にやはりスクールボーイをしながら学び、法学を専攻してマスターオブアーツをとって帰朝したのは28才の歳であった。

中学時代から漢詩がつくれ、俳句も和歌もでき、文章は夏目金之助と並び称されたほどの力量であった。この夏目金之助は実は夏目漱石その人である。斯うした立派な文学青年が、更に8年間の滞米生活によって新しい知識と国際的常識を存分身につけて帰朝したのである。而も容姿は極めて勝れ誠に申分のない青年紳

士であったに違いない。

とき恰も日本の国内は日清戦争の勝利に酔っているときであった。米山青年は日本を世界的レベルに導きたいという理想の下に、まず新聞記者を志望した。当時代表的な新聞社は福沢諭吉の主催していた時事新報社であったので、これに狙いを付けたが、ところが当時新聞をとっているところは都会は別として、地方では役場と学校と地主位ということで、新聞社は何れも経営難のために新聞記者の俸給は全くお話にならないものだった。

そこで米山青年は新聞記者志望を断念して、取りあえず留学中に翻訳してあった提督ペルリー伝を出版することにして、その題字を当代第一級の政治家で且つ書道で名の高い勝海舟に依頼することができた。「初雷発東隅・両午仲夏・題提督彼里・海舟」と書いてくれた。序文は旧友藤田四郎(農商務省農務局長)に書いてもらって実業の日本社から出版した。この本はよく売れた。

これを縁に米山青年は勝海舟から色々のことを聞いて明治維新史を書くつもりであった。

斯様な次第で米山さんは、帰朝後まず福沢先生に白羽の矢を立て、みたが、結局は勝海舟に巡りあうことになったのである。

当時勝先生はもう73才で、晩年に近かったため、東京赤坂氷川町の勝邸では来訪者への面会は制限しておられたが、米山青年は足しげく訪ねた。「君はよく来てくれるが、いまに衰くると足が遠のくよ、みな出世すると来なくなるものじゃ、尤も君の衰くなる頃には俺もこの世には居ないからかまわないがね。」このように勝海舟は皮肉屋でもあった。

またその頃海舟は世間の人を相手にするよりも、桜の花と語り度いとてその心境を幾つかの句に現わしている。「いざ老も気力くらべん雪の梅」もその一つである。実は私の手元に海舟が梅の木を書きそれに「払わねど浮世の塵のあともなく 雪解けののちの梅の初花」と書いた軸がある。伊東深水の梅の軸と並べてみると海舟の梅は全く民芸調で仲々味がある。ところで米山さんは梅吉であるから、梅についての句があつていゝ筈と思つて調べてみたが、あれだけ沢山の歌を読みながら梅の句は存外に少なく僅に「紅梅」と題しながらその歌には「そのかおり色にみせまく紅の、こくさき出づる花の心か」と敢えて梅という言葉を選んでいるような感じさえ受けた。

しかし、米山青年は海舟から可愛がられていたので、特に寝室にまで通されて雑談の中に教えを乞うことができた或る日の海舟の朝飯は紅茶一杯に最中二つ

だったと米山さんの記録に載っている。

その頃信州の片田舎から出てきた18才の苦学生が勝先生の門を叩いて教えを乞うたが、門前払いを喰った。それにもこりす再三訪問を繰返すうちに、ついに許を得ることができ、最後に先生はその書生に自分の写真と立派な書を与えられた。「平居、寡欲、養心、臨大、節刻、愼生、委命、海舟」と書いた大きな額である。

勝海舟は老境にあるとはいえ、気が向けば一介の書生にもこんな厚意を示めされた人かと感嘆させざるを得なかった。その書生というのは実は私の義兄（故小平三郎）で、後日青山南町の米山邸の近くに住んでいたのだから、或る時あることで米山さんが立寄られて、掛けてあったこの額をみられて吃驚して、その由来について話合ったところ、その揮毫してもらったのは明治28年のことで、丁度米山青年が提督彼里伝の題字を書いてもらわれた年で、その奇遇に驚き、爾来義兄は米山さんとの昵懇を深めることができた。

その後その額は義兄からの形見として現在私の家の応接室に掛けてあるが、朝な夕なに眺めながらも、その書の荘重さと風雅な筆勢には自ら心打たれるものがあり、またその文句に至っては、わが家の教訓としてこよなきものとなっている。

米山さんは勝伯爵と福沢先生を特に偉人として尊敬していた。ところが福沢先生は「瘦我慢の説」という長い論文を書いて、勝伯と榎本武揚子爵を強く非難した。その文中の一節には「賈下等は江戸城と共に戦死した僚友幕臣の霊を払うのが第一だ、栄爵を頂戴して明治政府に仕えることは間違っている。」「夜中に夢覚めて悔を感じることはないが、武士としては瘦せ我慢がなければならぬ。勝算なくともなぜに江戸城を枕に最後の戦を試みなかったか、よし江戸は兵火から救ったにしても、なぜ切腹しなかったか」と嘖めている。

この手紙は実は明治24年に書かれたが、長く引出しの底に納められていて、晩年になってその写しを勝伯と榎本子に送り、これを公表するが異議はないかと尋ねた。勝伯は「行蔵は我に存す、毀誉褒へんは世界に委せているから御発表御自由に」と返事した。これは海舟の有名な返し文句とされているものである。

この事件について米山さんは「勝海舟と福沢諭吉」という論文を書き、よく事情に通じている筈の福沢先生が、こうまでされるとは合点がいけない。榎本の助命を母親に代って一文を草した福沢先生が、榎本はなぜ五稜郭で討死しなかったかと嘖めているのは実に不可解である。

ところで勝と福沢との出会いは、万延元年（丁度榎田門の変で、井伊大老が暗殺された歳である）咸臨丸で渡米のときに始まるのである。

日本最初の米国への使節、木村摂津守（37才）咸臨丸艦長勝海舟（38才）通訳福沢諭吉（27才）外約90数名を乗せた咸臨丸は浦賀港を出帆した。そのとき勝はやゝ病弱の上舟に弱かったので、福沢等はその看護に苦勞した。ところがサンフランシスコに着くや勝はすっかり元気を取り戻して、オランダ語なら出来るが英語には弱いにも拘らず、アメリカ人の間をかきめぐり、如何にも愉快そうに渡り合っていた。その位であるから先方からも「キャプテン・カツノ」と仲々受けがよかった。

帰朝後勝は何もかも自分の功績のように報告したので、福沢は「勝という男はするい男だ」と機嫌がわるかった。

福沢の「瘦我慢の説」は正にその不機嫌の現れでもあるといわれている。

なお、福沢が問題にしたと思われることは、勝が明治2年に子爵を賜わるといふ内意があったとき、「これまでは並みの男と思ひしに五尺に足りぬ四尺なりとは」という狂歌を読んで、子爵に対して不満の意を述べたために、一級上位伯爵を賜わったという逸話が残っている、一方福沢には、その為教育の功績に対して子爵の内意があったが、自分は一生平民でいたいとこれを辞退した。その代りに六万円の御下賜金があって、それを慶応義塾に寄付し、記念の建物を建てさせた。

海舟は豪い人ではあるが、利益を忘れぬ人だったらしく、そこが算盤を離れた西郷とは違ふところといわれている。

元来米山さんは福沢先生に対しては、吾人福沢と称し、大教育家であり、大経倫家であつて、而も権力に屈せず、富貴を求めず、一平民として時代を指導した「大常識家」であると絶賛を惜しまなかったのである。

さて米山さんは帰朝して2年目、丁度30才のとき、当時の財政界の大御所井上馨侯爵の紹介で、三井銀行の益田孝と中上川彦次郎に面会し、直ちに同行に就職することができた。当時の三井銀行は日本第一等の民間銀行であつた。早くも翌年神戸支店次席に抜擢されていた。そのとき本店秘書課から欧米銀行業務視察の出張命令が出ていたが、折も折重大な電報が飛び込んできた。時たまたま政変で新に松方内閣が組閣され、内務大臣芳川顕正伯の秘書官に採用するから直ちに上京せよという内容であつた。その発信者は勝伯だった

らしい。何れにしても30才の若さで大臣秘書官とは破格の出世である。米山さんは勝からず迷った。しかし恩師勝先生からの有難い御厚意ではあるが、折角三井銀行へ心配してくれた藤田氏や井上侯爵に対して相済まなくなるといふことで、またとないこの推薦も辞退することに決心した。

大正6年、米山さんが三井銀行常務取締役として50才のとき、政府は米国へ財政経済視察団を派遣することになり、団長に男爵目賀田種太郎が任命され、米山さんはその随員に加えられた。そのときニューヨークでは三井物産ダラス支店長の福島喜三次氏が案内役を務めたが、彼は既にダラスロータリークラブのメンバーであった。

たまたま大きな汽船二艘に乗込む紳士淑女の一行をみて、それが英国のエジンバラ（ポールハリス夫人の郷里）で初めて開かれるロータリー国際大会に出席するところということなどロータリーについて色々と言明を聞き、米山さんはロータリーに対して異常な興味を覚えた。

大正9年ついに東京ロータリークラブが誕生した。これは米山さんがニューヨークから持帰ったロータリーの種が美事に発芽したものである。

それにしてもそれまでの米山さんの努力は並大抵のものではなかった。日本のロータリーが今日堂々とオルソドックスのスタイルを維持しつつ発展を続けているのは、まさに米山さんの蒔かれた種の実りに外ならない。

さてここで一つの推測が許されるならば、目賀田男爵は勝海舟の女婿であったので、もしも米山さんが勝海舟に師事していなかったならばこの調査団に加えられていなかったかもしれない、そうなればロータリーの日本への移入はもっと遅れていたであろう。それよりも海舟の推薦に応じて大臣秘書官になっていたならばロータリーとの関係は全くあり得なかったであろう。

斯う考えてくると、海舟という人は面倒を見始めた人には最後まで面倒をみる人であり、米山さんもお世話になった人には最後まで礼を尽すことを忘れぬ人であったことがわかる。蓋しこれが英雄偉人の共通点であろう。誠に教えられるところがある。

米山さんは55才で取締役という名義を残して常務取締役を辞任した。時たまたま大正12年の関東大震災の歳であつた。三井銀行大阪西支店長であった私の兄（長井村太）が早速米山さんに見舞状を出した。米山さんはそれに対して極めて丁寧な礼状を書かれた。その手紙は現在私の手許にあるが、その懇切さは全く上

下の差のない点に頭がさがる思いがした。

昭和3年、米山さんは公益のために多額の私財を寄付した功によって紺綬褒章を下賜され、昭和13年には貴族院議員に勅選されて勲四等に叙せられた。

米山さんは45才頃から所謂「新隠居論」を提唱され、自らも55才頃から特に社会奉仕の実践を心掛けられた。

まず日本赤十字社のために、第15回赤十字国際大会に日本代表をつとめられた。

昭和9年三井合名により3,000万円という大金を出させて三井報恩会を創り、自ら初代理事長に就任し、医療保護に特に考慮を払ったのである。

まず療養所を青森から沖縄に至るまで日本各地の施設を視察したが、患者への慰問品はすべて自弁された。

視察の結果政府を援助して療養所に3,000床を増設させた、それによって浮浪癩患者の大部分を収容することができた。

また癌治療のために百万円の医療費を以ってラジウムを購入して癌研に寄付した。その他結核予防のためには巨額を投じて療養施設を数ヶ所造り、また精神病院の新設拡充や、恩賜財団済生会への多額の援助や性病、トラコーマ、寄生虫病、麻薬患者や盲人の治療等、その他社会事業、農村振興事業、学術研究の助成等を幅広く行なった。

米山さんは三井信託社長を辞めて、郷里長泉村立小学校に米山文庫（鉄筋コンクリート建）を寄付した。それより先、母校青山学院には私費で財団法人緑岡小学校を建設し、自ら校長となった。

なお青山学院には講堂の建設など数知れぬ奉仕をした。

米山さんはまたよく学生の面倒をみ、中には本人には知らせずに学費の補助をしておられたそうである。最も有名なのはアジアの留学生を自費で、援助しておられたことでこれが元で東京RCに米山記念奨学会が発展して、今日多数のアジア留学生を迎えるに至っている。

米山さんは国際ロータリー第70区（東京）がパナーとなり、昭和4年にはダラス世界大会に出席した。そしてRI理事として重要な地位を占めていた。

昭和11年にはポールハリス著 This Rotarian Age を訳して「ロータリーの理想と友愛」を出版した。

さて勝海舟は明治維新の大政治家であると同時によく青年の指導に当られたが、もともと幕府の軍艦奉行としてオランダ海軍を勉強し、よく帝国海軍を創立した。後日東郷大將が日本海の艦戦で、バルチック艦隊

を全滅させせたのもこの海軍創設者の力に負うところ大であるといわれている。

米山梅吉は、文才豊かな正義を重じる財界人であって、いち早くロータリー精神を日本に導入し、それが今日世界第二位のロータリー国への礎を築き上げた功労者であるが、その際には海舟先生から受けた熏陶の力は否定し得ないであろう。

次に米山さんの蔵書は、静岡県駿東郡長泉村下土狩の洋間の本棚にはギッシリと並べられていた。まず大日本文化協会刊行の翻訳叢書数十冊（フランス革命史、政党本質論）鎌倉笹目別荘の純洋間の壁の大半は書架で、それにギッシリ立派な洋書が並べられていた。その主なものは

Lodge H.C. Alexander Hamilton

George Washington

Reynoldt C. Lincoln, The Greatest Man Of 19th Century

Williams H.S. The Histonans History. Of The World 25Vols

The Cambrige Modern History 13 Vols

Wells, H.G. The Outline Of History

Wella, H.G. A Short History Of The World

Everymans Library が数十冊（主にカーライル等のクラシックなもの）その他多数の蔵書。

青山南町の書齋二面は全部書架で和漢書と Banking and Finance が取められていた。

巨大なウエブスター辞典

エンサイクロペヂア ブリタニカ全冊

ブライスの American Commonwealth と Modern Democracy

以上の目録を見たわけでも、米山さんは如何に蔵書家であったかたゞ驚嘆の外ない。

これ等から得た英知によって、日本のロータリーを強く正しく指導したのであろう。

この中で「三井銀行欧米出張報告書」は、1,017頁にも及ぶものであって、これによって日本の銀行業務に近代性を注くことができた。

「東また東」心の華叢書は、昭和4年、ダラス R 世界大会に出席され（五度目の渡米）、翌年欧州へ廻られて、昭和5年に出版されたもの、「常識 関門」はその序に増田義一は次のように書いている。「米山君は実業界稀にみる博覧強識の士で、君は本業の経済財政方面は言うまでもなく、哲学に於いても、史学に於いても、造詣深く、詩をよくし、歌をよくし、文をよくし、言論をよくし、行くところとして可ならざるはなく、真に典形的紳士である。殊に、常識の円満に発達

してられる点に於いては、君を知る者の齊しく賞揚するところである。

常識は処世の羅針盤にして、人格完成の最大要素である。君の常識関門は、後進青年の為に、従来求めて得られなかったものである」と

常識の養成、常識と禪、スポーツマンシップ、勝海舟と福沢諭吉などが書かれている。

「幕末西洋文化と沼津兵学校」は、米山さんがその後うけた沼津中学校に学んだ関係もあって、その歴史的關係を悉さに書かれている。

明治維新の初め、徳川氏の都城となった沼津では、沼津兵学校を建てたところ、旧幕府の学者や人材が相ついでここに集まり、またこれをきいた諸藩の子弟も学ばんとして集まるものが多く、ために沼津は天下学問の地たる観を呈した。一方明治政府は色々に改革に懸命で、特に軍政の本尊ともいべき洋学者の大村益次郎は、大学建設の計画を建てたが、しかし人材に乏しく困難を来し、致し方なく新知識をもっている人物を静岡藩から物色せざるを得なくなった。まず沼津兵学校の頭取であった洋学者の白眉とされていた西周が第一に徵命された、続いて旧幕臣の召されて東京に帰るものが続出した。斯うして西洋文明の再輸出が静岡藩から行われたのである。

一体西周とはどういう人物か、彼はもと西周助と言った人であるが、維新時西周と改名した人で、初め儒学特に宗学を修めたが、後蘭学を学びオランダに留学して正規に勉強した人である。哲学という術語も、心理という言葉も西先生が使いはじめたという稀にみる大学者であった。斯うした立派な校長の沼津兵学校も、長年月を経ずして明治政府に合流のかたちで廃校されてしまったのである。

こういう関係で、沼津兵学校が廃止された後も、沼津には人材が残されていたのである。

米山さんは沼津が懐しく後日沼津旧城内丸馬出門の一角で、集成舎のあった跡に住んだことがある。

集成舎というのは沼津兵学校の附属小学校であった。実はこれを第二の兵学校にしようとする新式の教育を計画したのが江原素六であった、この人は静岡藩から選ばれて米国へ留学させられた傑物で、彼は英語の教育を盛んにしようとして、当時驚くべき高給で、横浜から外人教師を招いた。

其の後江原が東京に出てからはその後任に名和謙次校長が就任した。名和校長は漢文学の大家であって洋学にも通じた進歩的な思想家で、自由民権の道理を論ずるときには卓を叩いて説き、生徒達も亦討論会や演説会で盛んに弁舌を磨いたものである。特に作文に重

点をおき、毎週その成績が詰所に張出された。勢い生徒の学力は著しく向上した。米山さんは14才のときから16才までこの沼津中学に勉強することができたのである。

当時の沼津中学は明治18年に県立中学に統合された。

「青雲録」は昭和13年の出版で、米国建国の主ワシントンや救世主リンカーンに続いて真の愛国政治家であったアレキサンダー、ハミルトンの伝と、国土本田庸一先生の伝記である。本田先生は青山学院で米山さんが、キリスト教的教育をうけた大恩人である。内村監三は、本田庸一がもし政治的野心を棄てなかったならば、最良の衆議院議長になった人物であろうと、また松村介石は、彼はキリスト教界の第一人者であると評していた。

「和歌選集」や「俳句選集」「漢詩選集」或は「歌集四十雀」等は藍登米山梅吉が長年に渡ってよまれた句や詩であって、その力量については佐々木信綱等の大家の賞讃するところである。

「ロータリーの理想と友愛」はポールハリス著の「This Rotarian Age」を訳したものでロータリーの根本義を明にしたものである。

この中で米山が最も感を深くしたのは、

1. ポールハリスの態度が誠に敬虔で、Rのような大運動を起した人のように見えない。
2. 彼は頗る文学的天分に富んでいる。
3. 彼は躬行実践の人で、艱難辛苦をなめたその半生から得た温い人情味を通じての交友が、「己が他から施こされんと希う如く他に施せ」の主張に生きています。

以上は、わが国Rの先覚者米山梅吉の生い立ち、学歴、職歴、著書、蔵書、人生観、R歴、等の片鱗に触れたに過ぎない。中でもRの奉仕の実践についてはただただ驚嘆する外ない。中でも、東京RCは彼が何人かのアジア留学生の学費の援助をしていたことを高くとりあげて、米山ファンドの制度を造ったが、その後日本全体のRでロータリー記念米山奨学会への発展をみせ、既に16年を経過した。しかしこれに関する全RCとしての認識はまだ浅く、米山さんの命日である4月28日を中心とした米山記念週間の設定についても、京都、大阪、東京の三地区に留まっているのもその現れであろう。

実は米山奨学会は、R財団の奨学金とは異り、寧ろRのない主としてアジアの途上国の人達への援助であって、これこそわが国Rの自主的な国際奉仕であり、且つまた立派に世界社会奉仕に通じるものである。

大正年間から日本の在外研究生は、ロックフェラー財団や、フルブライト奨学金等の恩恵によって勉強出来たものである。

先週まで来日していた米国上院議員J. ウィリアム、フルブライトも、青年時代英国オックスフォード大学の奨学金をうけていた留学生であった、その感激からであろうか、今から30年前米国の国会にフルブライト法案を成立させ、今日まで多くの国との交換留学生の教育に尽し、日本人だけでも4,500人もの学者や学生にフルブライト奨学金を与えて感謝されている。

この「日米文化交流に尽した絶大な功績」が評価されて、国際交流基金賞で今回の来日となったのである。

彼が今までに批判してやまなかった米国のインド支那政策は、今や劇的な悲惨な末路を展開してしまっ

た。米国がインド支那から全面的に手を引いてしまった今日は、日本が之に代って国際平和への手を差し伸べることを彼は強く期待している。

これに対して日本政府も、所謂民族自決の線で援助に向かおうとしているが、私は今こそ米山奨学会は彼等に向って恩切ってその手を差し伸べるべき正に正念場の到来と信じるものである。

今年の359地区大会で行われた国際理解シンポジウムで、韓国代表は、その発言の中で、日本の米山奨学金制度を高く賞讃し、その発展を希望して止まなかったことからしても、米山奨学会の活動は、アジアに於いて最も要望されているものと考えて間違いない。

「ただ国際教育は、一国の外交政策の道具に使われなければならない。もしそうであればそれは教育の腐敗であり、必ず失敗する」と彼フルブライトが強調していたことは、われわれも十分噛みしめておく必要がある。

然らばこの事業を行うに当ってまずいつて着手しなければならぬことは何か、それは米山奨学金の基金の充実である。それには各地区に米山週間を設定し、その意義を周知徹底させ、地区に米山奨学会推進委員会を、各RCに米山委員会を設けて、各会員からその目的達成のためになるべく多くの寄付金が集まるよう努力することが必要である。

現在の米山奨学金は、主としてアジアの31ヶ国から日本への留学生230名に、夫々所属のRCの米山カウンセラーが世話役となり毎月4万円の奨学金が与えられているのである。

因みに日本のRが、昨年1年間に行ったR財団への寄付額は、6億4千5百万円余で、米山奨学会へのそ



れは1億4千5百万円余であって、米山奨学会への寄付金総額は、R財団の約半に過ぎない。

最近のR財団へ寄付額は全世界で1人当り\$ 4.29であるが、第359地区では\$53.87 第358地区では\$44.64であって、この両地区の寄付額は世界平均の13倍と11倍にもなっていて、359地区がパナーは世界大会に於いて世界最大のR財団貢献国として驚嘆されたほどである。

06  
6424  
ロータリー文庫

追記

義兄故小平三郎（故小池国三氏に仕え、のち山一証券相談役）は、18才（明28）のとき勝海舟先生に弟子入りし、記念に雪と肖像写真を頂いていた。（明28）

後日（昭30）徳富蘇峯がやはり、海舟先生の教をうけていたことを知って、伊豆山の蘇峯邸を訪ねたところ、応接間に同じ海舟の写真がかけてあった。そこで、持参していったこの写真に蘇峯先生が「勝海舟先生の肖像」「及門蘇峯、九十二翁」と自書してくれたのである。

•米山翁の軸の説明（兄の長井村太が直接書いて頂いたもの）

田家の雪 梅吉  
ふる雪に となりもへだてて 山すその  
ひそめる里に 年豊かなり

•海舟梅の軸の説明

払らはねど うき世の塵のあともなく  
雪解ののちの 梅のはつ花 海舟静人

•海舟扁額の説明

海委愔節臨養寡平  
舟命生刻大心欲居

•勝海舟肖像の説明

徳富蘇峯が勝海舟肖像と書き、自分も海舟先生の門下である。蘇峯九十二才と付記した。

<編集後記>

本稿は、去る4月28日春の米山記念日に同館に於て、多数会員御参集の折、長井氏による講演を記述したものであります。

長井氏が米山梅吉氏と格別な間柄にあるだけに講演も熱気を帯び、知られざる米山梅吉氏の一面をうかがうことが出来ましたことは大変有意義でありました。

文責 第362地区ロータリー友の委員  
幾田裕男

昭和50年6月30日 印刷